

(1)進む気象変化と農産物

先日のNHK・TVクローズアップ現代で“くだもの異変!?”が放映されました。ミカンの浮皮やリンゴの着色不良など直近の果物にみられる特徴的な面が報じられていましたが、気候に対する適応性の巾が狭い果樹ならではの深刻さを強調したものと受けとめなければならないのではないのでしょうか。同時に果物市況が低迷を続けている現実もあり、果樹園芸の先行き不安定さが云々されている状況での世界的温暖化現象に弄ばれる状況に追い込まれるのでは、何とも言いようのないことでしょう。

そして一年一作の稲作や果樹と異なり、一部には周年栽培も行われている野菜や花きにも、どんな影響が出てくるのか気にかかることではないのでしょうか。年平均気温が1℃上昇することは、東京の気温が宮崎市並になることと言っていますが、気温の上昇ばかりでなく雨の降り方も荒っぽい大雨被害をもたらす集中豪雨での被害も頻発している最近の状況ですし、平年比云々の過去のデータでは推し測れない事態を覚悟しなければならなくなるのでしょうか。

露地作での気温変化は冬春期野菜のより前進化をもたらし、逆に夏期の生育停滞を助長する傾向があると言われます。また、加温施設野菜や花きでは暖冬で燃料使用量を圧縮できるメリットがあるものの、コントロールの仕方如何ででは生育障害の発生など裏腹な部分もあって、一概に言えないながら確実に影響され始めていると考え、顕在化しつつある状況に対処しなければならないと思います。

COP15など世界的な話題はそれとして、食と農に係わる分野に携わるものは、農の問題は農家だけの問題ではなく全ての人たちの問題として考えなければならないと思います。温暖化の現象が生産の現場で既に種々の事例として起きているこの現実を、深刻にではなく素直に受け止め、如何に対処して行くべきかを皆が考え行動することが必要ではないのでしょうか。特に想いのままを通して来た食べる側の言い分は、“自然の摂理の前では無にも等しいこと”と再考せざるを得ないかも知れません。

(鈴木重雄筆)